街のオアシス 再発見 第2回

個性際立つ区画
大通公園「西6～12丁目」（札幌市）

森林インストラクター
小沢　信行（おざわ　のぶゆき）

十勝管内足寄町出身。1978年北海道新聞社に入社。記者として函館、釧路、小樽などで勤務。編集委員、論説委員などを勤め2017年退職。日本森林インストラクター協会会員。道新文化センターで樹木観察の講師を務める。著書に「こうしてできた北の銅像」。

大通公園の西１～５丁目は噴水が多く、それを取り巻くようにベンチや芝生が配置されていますが、６丁目以西は趣（おもむき）がガラリと変わります。ケヤキが林立する６丁目、子どもの遊び場となっている９丁目、銅像が並立する10丁目、バラが咲き誇る12丁目。区画ごとに個性が際立っています。

西12丁目のバラ園には、美を添える女性像も

西７丁目。周囲より高い２本の木がユリノキ

ユリノキがシンボル

６月上旬、YOSAKOIソーラン祭りの華やかな演舞に誘われるように黄色いユリノキが咲き始めます。西７丁目には北側に３本、南側に１本あり、特に北側は背後のビルと競い合うほどの高さになっています。

花の形がユリに似ているのが語源といわれますが、米国ではチューリップにたとえてチューリップツリーと呼ばれています。

米国東部原産で日本には明治初期に移入されました。ところが、本州では千数百万年前の地層からユリノキの化石が見つかっています。ヨーロッパでも化石が出土していることから、かつては北半球で自生して

ユリノキのかれんな花とユニークな形の葉

いたが、気候変動でほとんどが死に絶え、一部地域でのみ生き残ったと考えられています。中国にはシナユリノキが自生しています。

花の開き咲き始めは薄緑色ですが、次第に黄色味を帯びてきます。サクラのように一斉には開花せず、6月下旬ごろまで次々と咲き続けます。

ユリノキの葉をデザインしたトイレ表示板

高木（こうぼく）のため花を近くで見ることは容易ではありませんが、7丁目北側の木は下の枝が垂れ下がっており、間近で観察することができます。運が良ければ、花弁の内側に水滴のような蜜がたくさん付いているのを発見できるかもしれません。

ユリノキが多い岩手県盛岡市では、養蜂業者がこの蜜を集め、ハチミツとして販売しています。

葉は半纏（はんてん）の形をしているためハンテンボクともいわれます。どこか幼児の服にも似た愛らしさです。長さ10～20㌢で大きく4～6裂し、ほかの樹木と違い先端はくぼんでいます。柄が長いのも特徴です。

ユリノキが7丁目のシンボルだと分かるのが、この一画にあるトイレです。男女の入口を示すマークがユリノキの葉になっています。葉に目鼻を付け、青色は男子用、赤色は女子用を表示しています。

札幌市内でほかにユリノキを見ることができるのは北大や知事公館などです。北限は深川付近で、クラーク記念国際高校の木は深川市の保存樹木に指定されています。

ケヤキが茂る広場

一方、西6丁目を象徴するのがケヤキです。枝が扇状に広がる樹形の美しい木で、広場の中央部に樹齢100年以上と思われる大樹が6本あります。大通公園で同じ種類の大木が1カ所にまとめて植えられているのはここだけです。

名前は木目が魅力的なことから、美が際立つという意味の「けやけし」に由来しています。北海道には自生しない木で、明治時代、入植した人たちが故郷をなつかしんで植えた「望郷樹」です。

花は葉が出るのと同時に咲きますが、地味で目立ちません。幹は老木になると、樹皮がうろこ状にはがれるので、一目で見分けがつきます。

葉は茂るにつれ表面がぶつぶつになります。その突起状のものは虫こぶです。ケヤキフシアブラムシという幼虫が寄生しているのです。1枚の葉に何個もの虫

枝が扇状に美しく広がるケヤキ

こぶができるため異様な光景です。

成虫になると、ケヤキを離れササの根に移住し繁殖します。そして秋に再び､卵を産むため戻ってきます。10月中旬、小さな虫の大群が飛び交う光景に出くわすことがあります。そんな時､ケヤキの幹をよく見ると、驚くほどたくさんの虫がへばりついています。

北海道にはない美しい木を移植したことで、人々を不快にさせるほど虫が繁殖する皮肉な結果が生まれてしまいました。

宮沢賢治の詩の舞台

西６丁目は宮沢賢治の詩「札幌市」（「春と修羅　第三集」）の舞台だといわれています。

「遠くなだれる灰光と　貨物列車のふるひのなかで
わたくしは湧きあがるかなしさを　きれぎれ青い神話に変へて　開拓紀念の楡（にれ）の広場に　力いっぱい撒（ま）いたけれども　小鳥はそれを啄（ついば）まなかった」

この詩は妹を失った悲しみを表現したとされています。「開拓紀念の楡の広場」は下書きで「開拓紀念の石碑の下」となっていました。「開拓紀念碑」は今も６丁目に存在します。

賢治文学の研究者、石本裕之（いしもとひろゆき）氏は、「記念碑」ではなく「紀念碑」である点が詩の表記と一致することなどを６丁目説の根拠とし、「この広場を今も象徴するものは、開拓紀念碑と、ニレ科の落葉高木すなわちケヤキの大樹六本である」（「旭川高専研究報文第44号」）と述べています。

碑は1886年偕楽園（かいらくえん）（現在の偕楽園緑地付近）に建立され1901年、現在地に移設されました。賢治は３度札幌に来ており、最後に訪れたのは1924年。詩が作られたのは1927年です。この地に賢治がたたずみ、悲しみに打ちひしがれたかと思うと、紀念碑やケヤキが特別な存在に見えてくるかもしれません。

140年近い歴史のある開拓紀念碑

子どもたちの遊び場

西９丁目にある有島武郎文学碑は、有島武郎記念会が40年忌の記念事業として1962年に建設しました。左側に短編小説「小さき者へ」の最後の部分を採った碑文、右側にそれを象徴する母子像のレリーフがはめ込まれています。周辺が将来、子どものための広場となることもあり、この作品が採用されました。

妻が病死した２年後の1918年に書かれたもので、当時、７歳を頭に男の年子が３人いました。「前途は遠い。そして暗い。然し恐れてはならぬ。恐れない者の前に道は開ける」などと書かれています。母を亡くしたわが子の将来を思いやる父親の心情が伝わってきます。碑文の筆を執ったのは武者小路実篤です。

1962年９月22日の除幕式に臨んだ親族は、武郎の弟で画家の生馬とその娘でした。作品のモデルとなった息子たちは、出席しませんでした。その理由は不明ですが、次男はすでに病死していました。

長男は黒澤明監督の映画「羅生門」に出演した名優森雅之です。森は父の死にずっとわだかまりを抱えていました。1923年、武郎が女性編集者と心中したことで、好奇の目にさらされたからです。「どこに行っても事件のことを聞かれて閉口した」「父親の死によって、ぼくの人生は一変した」と生前語っています（山田昭夫「有島武郎の世界」）。

父親が亡くなった時、長男は12歳。すでに物心が付いており、大きな心の傷となったのでしょう。武郎はあの感動的な文章を残しながら、愛情を注いだわが子の反発を受けることになるのです。

私生活がそうなったとしても、この小説は文学作品として普遍的な価値を持ち、１世紀以上にわたり多くの人に読み継がれてきました。文学碑はその証でもあるのです。

碑の周辺にはその後、プレイスロープと呼ばれる大きな滑り台や遊水路などの遊具が整備されました。

中でも、目を引くのが渦巻き状の滑り台、ブラック・スライド・マントラです。モエレ沼公園を設計した彫刻家イサム・ノグチの作品で、雪の白と対照的な黒御影石を素材にしています。

当初は９丁目に設置する予定でしたが1988年、公園を視察したノグチは８丁目と９丁目の間の道路を撤去し、そこに置くべきだと主張しました。広々とした場所で子どもたちに安心して遊んでほしいという願いからです。

ノグチは同年12月に他界しますが、その意向を受け入れた市は1992年６月、８丁目にマントラを仮設置。その後、道路を廃止し1993年11月、現在の場所に移設しました。８丁目と９丁目の一体化は、ノグチの提案がなければ実現していなかったかもしれません。

有島の作品が刻まれている文学碑

人気の滑り台ブラック・スライド・マントラ